「地域との共存」から見る火葬場設計に関する研究

指導教員　加茂　紀和子　教授　　小田　雅也

1. 研究の背景と目的　火葬場はかつて寺院風のデザインと高い煙突が象徴的で（図１）、環境公害やその機能から暗いイメージを持たれ、人家から離れて立地してきた。1970 年代後半からの技術の発達により高い煙突や排煙、臭気の問題が改善され、その必要性も十分認められている現在も、未だに迷惑施設として歓迎されにくい。一方で近年は葬送の場にふさわしい空間と同時に周辺環境との関係を意識し、地域と共存するものも現れ（図２）、その在り方は多様である。そこで本研究では、近年建てられた火葬場について地域との共存という観点からその設計手法を明らかにすることで現代の火葬場設計に質する知見を得ることを目的とする。

2. 研究概要　本研究では、建築専門誌『新建築』において 2000 年以降に掲載された火葬場 7 作品を研究対象とする（表１）。それらの作品について文献から得られた言説、図面、写真を研究資料とし、許可を得た 5 作品については現地調査を経て、近年の火葬場に置ける設計手法を明らかにしていく。

3. 言説分析　研究資料の言説分析を行うと作品全体に関するコンセプト、諸空間に関する意図、操作から『火葬場とその外部に関するもの』と『参列者の心情に関するもの』の二つが顕著に現れた（図３）。

3-1. 火葬場とその外部に関して　該当する言説を抽出すると複数の火葬場に現れる 3 つの言語群が得られた（表２，３）。〈連続性〉は特に多く、造形や色彩から建築を自然物に見立てたり、植栽を用いるというように周囲の自然要素[注1)]との視覚的連続性や、周辺住民が自由に出入りできるといった火葬場との関係性の連続が見られた。一方で〈境界〉も多く、火葬場と外部の間に線を引き、特別な場としている。一見相反する〈連続性〉と〈境界〉の共存が複数の火葬場において確認された。また〈地域性〉においては、葬送を馴染みのある場で行うという場所性の演出が見られた。

3-2. 参列者の心情に関して　該当する言説を抽出すると 7 つの言語群が得られた。また、各空間における参列者の心情と行為の対応関係を探るため、火葬という儀式の行為を入苑、告別、見送り、待合、収骨、退館に分け[注2)]、そこに現れる言語群と合わせて整理した（表４，５）。〈開放性〉や〈静寂性〉は多くの火葬場で現れ、自然要素を用いたり特徴的な形状を用いるなどしている。また、得られた言語群と各

図1　生駒市斎場（奈良県）

図2　瞑想の森　市営斎場（岐阜県）

表1　対象火葬場一覧

No	火葬場名	所在地	竣工年（年）	設計者	現地調査
①	川口市めぐりの森	埼玉県川口市	2017	伊東豊雄建築設計事務所	○
②	広島市西風館	広島県広島市	2011	日総建 車田建築設計事務所 広建コンサルタンツ	○
③	瞑想の森　市営斎場	岐阜県各務原市	2006	伊東豊雄建築設計事務所	○
④	今治市火葬場 / すいふう苑	愛媛県今治市	2004	佐藤総合計画	○
⑤	筑紫の丘斎場（R//C）	兵庫県太子町	2002	遠藤秀平建築設計事務所	○
⑥	横浜市北部斎場	神奈川県横浜市	2002	横浜市建築局 竹山実建築総合研究所	×
⑦	那珂聖苑	茨城県那珂町	2001	久米設計	×

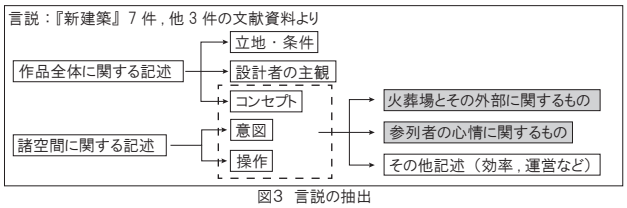


図3　言説の抽出

表2『火葬場とその外部に関するもの』抽出例

作品	項目	建築操作	意図	分類
②	建屋の周囲 柱の上部	・植栽	・公園の緑と連続した植栽帯を形成 ・自然と建築が一体となった景観	連続性
②	中庭	・広い水盤 ・鋭いエッジを持った献盆「石のテラス」	・瀬戸内海や太田川を表す ・抽象化された瀬戸の島並みと安芸の山並みの情景	地域性
⑤	エントランス	・東西に分割する 130m の壁	・内部（非日常）と外部（日常）とを区切る	連続性・境界
⑤	エントランス	・地面に繋がる大きなキャノピー	・完全な隔離ではなく周辺に開放しつつ視線を切る ・「開かれた地域施設」という、相反するあり方	連続性・境界

表3『火葬場とその外部に関するもの』抽出結果

言語群	言語例	該当作品						
〈連続性〉	一体化 / 連続 / 原風景にとけ込む	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈境界〉	遮断 / 生と死 / 内部（非日常）と外部（日常）	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈地域性〉	ふるさと / 地場産 / 現地産	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

表4『参列者の心情に関するもの』抽出例

作品	項目	建築操作	意図	分類
①	ホール	・火葬炉と告別収骨室を建物の中央にまとめ	・会葬者がぐるりと回遊する開放的な一体空間	開放性
		行為：入苑 / 告別 / 見送り / 待合 / 収骨 / 退館		
①	ホール	・木製のカーテンウォール建具越しに常に池の水辺や庭の緑を望む	・心の和む空間への願い	穏やかさ
		行為：入苑 / 告別 / 見送り / 待合 / 収骨 / 退館		
①	ホール	・ホールのポスト柱は地面から湧き上がるように屋根へと力強く連続	・曲面天井が柔らかく内部を包み込む空間	穏やかさ
		行為：入苑 / 告別 / 見送り / 待合 / 収骨 / 退館		

表5『参列者の心情に関するもの』抽出結果

言語群	言語例	該当作品						
〈開放性〉	開放的 / 明るく / 開放感 / 開く	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈穏やかさ〉	心の和む / 心情を癒す / やわらかい / 穏やかな	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈個別性〉	プライベート性 / 自分たちの空間 / 個別空間性	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈演出性〉	無重力感 / 浮遊感 / 緊張感 / 上昇感	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈静寂性〉	静かな / 落ち着いた / 静けさ / 静寂	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈厳粛性〉	厳かな / 荘厳 / 厳粛	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〈生と死〉	永訣の日の記憶 / 生と死 / 別れの意識	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

A Study on the Design of Crematorium from the Perspective of Coexistence with the Community

Masaya ODA

行為のクロス集計[注3)]を行った（図４）。告別、見送り、収骨では〈個別性〉や〈厳粛性〉のように故人との別れに集中し、それらの行為の前後で〈開放性〉、〈穏やかさ〉、〈静寂性〉のように心地よさをもたらし、参列者の気持ちの整理を促す意識が窺える。

4. 火葬場と周囲の関係　文献の図面、写真及び現地調査の記録より対象作品についてそれぞれ平面、立面の模式図化と立地についての分析図を作成し、火葬場と周囲の関係を探る（図５）。

4-1. 立地　森林周辺、あるいは物流センターのような機能的な施設が集積するエリアに位置するなど市街地には隣接しないものが多い。しかし、火葬場から 300M 以内に市街地が現れる事例もあり、地域住民との共存を考えていく必要性があるといえる。

4-2. 外部環境と空間構成　分析図より外部環境との関係という観点から共通項を７つ抽出した（図６）。視線に関するものが多く、他にも墓地に隣接し、地域において死を扱う場として位置づけられたり、公園と一体化し、地域に開かれるものが見られた。また、平面の分析図より火葬場の空間構成パターンを得た（図７）。告別、見送り、収骨の場は故人との別れに集中できるように閉じた空間となっているが、エントランスは大きなガラス面を有する作品が現れるなど、利用者を迎えたときの印象を明るく開放的にしているものもある。また、待合空間には全ての作品でガラス面が設けられ、外部環境を取り込み、火葬を待つ時間に自然や風景を感じさせている。一方で、このようなガラス面に沿う空間や火葬場そのものに対する外からの視線は〈樹木〉、〈レベル差〉、〈長アプローチ〉、〈池〉によって緩和している（図６）。高さが出てしまう炉室については奥側に配置され距離をとったり、背景ボリュームと融和させ、火葬場の圧迫感を緩和している。瞑想の森市営斎場を具体例に見ると（図５）、大きなガラスに囲まれる開放的な建物であるが、森林が周囲からの視線の緩衝帯となっており、待合空間側の大きなガラス面については隣接する墓地を訪れる人から見られるが、池で距離をとったり、墓地とのレベル差により視線が緩和され、プライベート性が保たれている。

5. まとめ　本研究を通して、周辺環境と連続させて調和を図り、火葬場を開いたものにする一方で、特別な場として周囲との間に線を引き、遺族が別れに集中できるプライベート性のある空間にするという一見相反する事柄を、地域性や地形、自然要素と建築意匠を絡め、バランスよく実現させることで、視覚的にも感覚的にも調和し、地域との共存が成されていることが分かった。このようにただ市街地から遠ざけるのではなく共存を図り、大切な人との別れの場として地域共有の認識が強まっていくことが期待される。

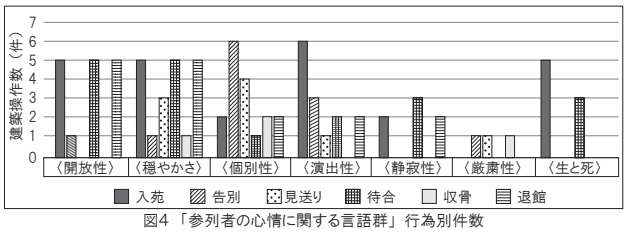


図4「参列者の心情に関する言語群」行為別件数

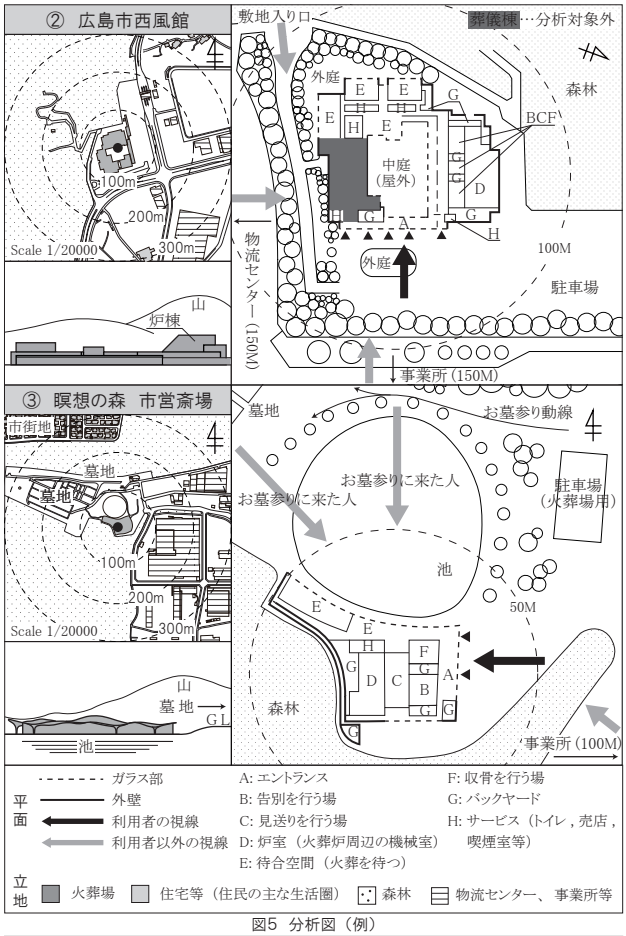
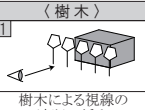
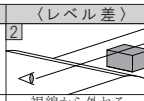
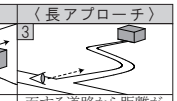


図5 分析図（例）

〈項目〉	〈樹木〉	〈レベル差〉	〈長アプローチ〉
模式図	1 	2 	3 
説明	樹木による視線の遮断・緩和	視線から外れる、ボリュームを感じにくい	面する道路から距離がとられ見えにくなる
該当作品	①,②,③,④,⑤,⑥,⑦	①,③,④,⑥	②,⑥

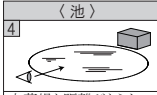
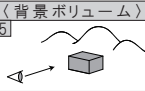
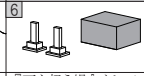
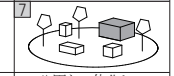
〈池〉	〈背景ボリューム〉	〈墓地隣接〉	〈公園型〉
4 	5 	6 	7 
火葬場と距離がとられ、圧迫感・視線の緩和	山などのボリュームとの融和による圧迫感の緩和	『死を扱う場』としての位置付けがされている	公園と一体化し、多くの人が訪れる
①,③	②,③,④,⑤,⑥	③,④,⑤	①,③

図6 外部環境に関する共通項

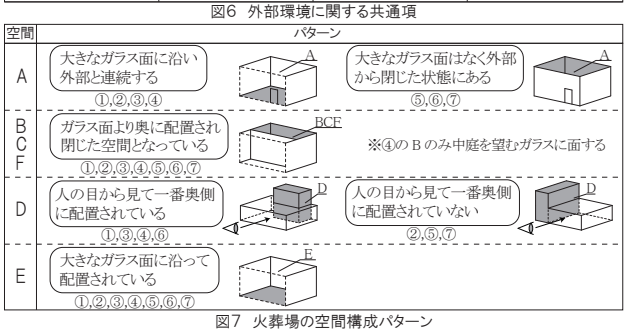


図7 火葬場の空間構成パターン

【注釈】
注 1）光や水、樹木といった要素を本研究では自然要素とする。注 2）「入苑」－敷地内に入ってから告別に至るまで、「告別」－告別室等にて告別を行う段階、「見送り」－棺が火葬炉に納まるのを見送る段階、「待合」－見送りを終え、火葬を待ち、収骨に至るまで、「収骨」－収骨室等にて収骨を行う段階、「退館」－収骨を終え、火葬場を後にするまで、とする。注 3）各言語群を意図とする建築操作の数を各行為ごとに集計した。

【参考文献】
1）新建築社『新建築』(2001年９月号～2018年７月号)2）建築資料研究社『建築設計資料109 葬祭場・納骨堂 2―別れの場に相応しい空間の創造』3）鹿島出版会『弔ふ建築　終の空間としての火葬場』4）新建築社『PROPOSE TO THE FUTURE 佐藤総合計画―コンペ・プロポーザルで時代に提案する』